

## 三十石舟の歴史

三十石舟は、京都から伏見、そして大阪間を流れる川に沿って米や酒、その他の品物などを運ぶのに使われていた伝統的な平底船の一種である。

長い歴史の中で、伏見は主要な内陸港に成長し、その成功の鍵は、三十石舟が重要な役割を果たした水路のネットワークを介した品物の輸送にあった。名前は、船が運ぶことができる量である 30 石、または約 4500 キロを指す。それが使用されていた期間、石は一人が一年に食べることができる米の量（酒の場合は飲むことができる量）と定義され、通常米で支払われていた税金を徴収する際利用された。

小型で軽量の船が伏見と京都の二条地区を結ぶ浅い高瀬川運河を航行し、より重い三十石舟は宇治川と淀川を大阪まで行き来した。貨物積み下ろしに重要な地点は伏見であった。

1872 年の京都博覧会の時までに、一部の船は港間を非常に速く運航していたため、文字通り「スピードボート」と呼ばれる早船という名前を得た。ピーク時には、320 隻の淀川早船が毎日、伏見から大阪まで昼も夜も往復した。鉄道の出現で最終的に衰退していくこととなり、最後の船は 1920 年に約 300 年の運航を終えて引退した。1998 年以来、モーター駆動のレプリカが、観光客を乗せて伏見の水路を周遊している。長建寺の入り口の外の栈橋か、寺田屋前にある船着き場から乗船することができる。ツアーは、特に春の桜の季節に人気だ。